

眞生

第十卷 第六號

□從來の人々は浄土教を未來主義だと思つてゐる人が多いやうです。乍ら死後に於て未來に浄土往生をするからと云つて、必ずしも未來教とは云へぬものがあります。

□何となればたとひ未來に往生をするものだと思つた人であつても、今現に西方に在します説法の彌陀を遙拜する限り、其の人の信仰は其の時已に一種の救いの中に在るからであります。

□而もそれは決して未來の救いでなく、如來を信じ如來を禮するとこゝろ、そこに一種の現証として、いかなる病苦にも堪え、困苦にも勝ちうる信仰の力を得てゐるからであります。而もそれらは現在の事實であつて、決して未來のものではありません。

□更に如來の光明が十方遍照であつて、念佛の衆生がそれに攝取せられると云ふ信仰は全く現生の利益であつて、如來と私共の生活は其の時已に未來を待つものではないのであります。

□古來浄土教では此の事を含めて現當二世の利益だと申して居りました。然にそれにもかゝらず、此の浄土教が純未來主義の如く考へられ、現實の救いを全く忘れたかの感があるのは何故でせう。

□之は主として佛教徒の怠慢であり、浄土教の誤解から來たものと言はねばなりません。殊に法然上人の浄土教に於て然りであります。少くとも上人をしてあれだけの慰安と活動の力とを與へたものは即ち上人の信仰の結果と云ふべきでせう。

□私共が此の世から如來の光明を中心として、永劫に生きやうとする運動を光明主義と云い、其の中に人生の意義を完ふして行かうとするのを眞生主義と云つて居りますのは深く此の理を現はしたものと云ふべきです。(念)

目次

信仰は働き	魁子
古木は朽つる	魁子
人生の眞意義	土屋觀道
浄土教徒の望みに就て	土屋觀道
根本佛教と浄土教	土屋觀道
念佛成佛の眞義	土屋觀道
吾朋使り	

信仰は働き

信仰は六つかしい事ではありません、御飯一杯も、人によそわして喫べてゐるのでなく人によそつて遣つて喫べるほどの事でありませぬ。主人が主人顔をしてゐるのでなく、妻のをよそつてやる、妻が老人のを、老人が息子ののを、子供も女中の御膳を持つて来る、女中も子供の「御余り」をたべてやる——御飯一つたべるのでも、皆がいそくと元氣で楽しく、何か知らぬ賑やかに喫べれるといふのが信仰だと思ひます。

信仰は「考へ」たり、「味つたり」して、頭の中へだけ思索を詰めてこむことではない、寧ろ壓へようとしても壓へることの出来ぬ元氣が働きたつて内から溢れ出て来ることだと思ひます。

自分の全体——身も心もが魁つて、活き／＼と活動を始めることだと思ひます。信仰は内に隠して置くものでもなく、又内に隠れてゐるものでもなく、自然に發動して外に、キビ／＼とした働きたつてゐることです。

辨榮上人が「教へ主世尊が、六根常に淨らかに、み顔永久へに麗しく在せしは、内靈應に充ち給ひければなり」と仰せられたように、顔も姿も、望みと活氣に充ちて生き／＼と輝いて行くことだと思ひます。働かといふのは、金儲けのために働くのではありません、生かされてゐる以上働くのは當り前のことです。今日一日活かして置いて下さつたといふことは、今日一日の仕事をやうせよといふことであります。だから今日の一日を自分の精一杯で果たさせねば勿体ない。勘定に合ふ、合はぬは第二の問題であります。貧金問題は人間同志の間柄の事で時の相場であります。それが爲めに第一の如來さまへ對する「つとめ」の心をも失つてはならぬと思ひます。(魁子)

宗教には既成も、新成もない。

宗教とは、天地の生かし給ふお力に活きるといふことだから、今更ら、撲滅せようとして撲滅せれるものでなく、拒絶せようとして拒絶せれるものではない。恰度金魚が水の中にゐて、水のことをさう斯ういふようなもので、水そのモノが無かつたら、金魚それ自身が、生きちや居られなかつたのですから。

而し、宗教が生活の上に現はれて規矩となり思想の上に現はれて教義となり、作法の上に現れて儀式となり、教團、教權を形造つて來た場合には、時代と民衆との上に適不適を生じて、それは正しい宗教精神に因つて、常に是正されて行かんならぬものです。

だから宗教それ自身は、常に固形態にならぬように、解體しては進んで行かんならぬものであります。恰度ロケットが爆發して爆發しては、その爆發した力でだん／＼高く飛んでゆくようなものであります。

だから宗教には、最も多くの革命が古來行はれました、又最も激しい内面的闘争が續けられて來つてゐるのです。

だから此の意味からして、既成教團、既成教義の扱方に就ては、今も革命が行はねばなりません、又行はれつゝあります。所謂反宗教運動は其一つでせう。此反宗教運動に三通りあると思ひます。

一つは既成教團それ自身が、まず／＼其醜を曝らして他から壞れられんでも、自ら壞れつゝあるもの。二つには、宗教に活きる自由人が、體驗宗教の事實より既成宗團に革命を行はんとしつゝあるもの。三つには、マルクス主義の人々が、既成宗教行儀に對し、社會的存在價值を問はんとしつゝあるもの。此内、第三者は既成宗教に對して、最も手厳しい敵であると共に、又反面純粹宗教に對し、最も忠實な産婆役をつとめつゝあるものであります。そして第二の宗教的新人達は、内部から宗教の革命を誘導しつゝあるのです。

老木は朽ちる、而し新生命は日に／＼に盛りつゝあります——。(魁子)



人生の眞意義

土屋 觀 道

一、動物の生活

私は人類の生活を別つて三つとなしてゐる。其の第一は動物的生活である。動物的生活とは食欲と色慾との奴隷時代の生活であつて、普通の動物と何等選ぶことのない肉慾生活の人を云ふのである。最も生物學者は此の二つの要求を人類生活の根本要素として許してゐる。否いかなる人間も此の二つの生活を許さないものはなからう。乍然私の意味する動物的生活とは此の食欲性慾とを充たす他には何等の望みない生活の人を云ふのであつて、其の人の生活の中心が常に食欲と色慾との二つに左右されて居る人の生活を云ふのである。

乍然靜に動物の生活を觀察すればそのみが必要しも動物の本能ではないやうである。否それどころか、彼等に於ける性と食とは主として自己保存と種族保存との二作用にすぎぬものであつて、彼等はそれを以て最後の目的としてゐるものではないやうである。従つて彼等は一定の食を充たせばそれ以上に之を食ふことを決してしない。殊に性慾問題に對しても其の目的を達すれば或る時期までは決して交尾せぬと云ふ動物が可なりに多い。此の點反つて多くの人類よりも規則正しいものである。然ば食と性との外に彼等は何を望むであらうか、彼等は自然に音樂を楽しむ、特に鳥の歌い蟲の鳴

くが如きは其の事實を示すものと云つてよい。其の他多くの鳥獸が雌を引つける爲めに其の美麗を極めて居ると云ふが如きは彼等の中にも自然に其の美を楽しむの性があるのを應用したものと云つてよい。

其の他、疲れては休み、或は眠る、或は親子相睦み、相戯れて遊ぶが如きも靜に望むれば實に自然の中にあつて其の生を楽しむの姿ではないかと思ふ。して見ると彼等の生活が弱肉強食、生存競争と云ふことはたゞ單に彼等が自己の生存と種族の保存上止むに止まれぬ一方面に過ぎぬものではなからうか。

斯くの如く動物生活の自然の姿を望むれば私共は必ずしも動物生活と云ふものを單に動物なりと云ふ點を以つて批難することのできないやうな氣がしてならない。

乍然それにもかかはらず、私共はそれでも尙動物であることを好まないものがあるではないか。それは一体何故であらうか。

それは少くとも人類の進歩による。否少くとも動物以上に人間の進んだところがあるからではないか。之は特に動物と人類との比較によつて、私共の知るべき點である。其の中でも私共が彼等と非常に異なるところは機械の使用と宗教の生活があると云ふことである。

二、經濟生活

然ば第二の生活は何であるか、それは即ち經濟中心の生活である。一も生活、二も生活で、生活問題と云へば已に經濟問題であることさへ今日の人は思ふほごになつた。所謂今日はすべてが經濟中心の生活となり終つた感がある。之は一面、人類の生活が今までのやうに經濟なくしては考へられなくなつたが爲めである。従つて、名譽だの道德だのと云ふことも命あつての上のことで、經濟なくしては

生きて行かれぬと云ふことになれば名譽も道德もあつたものでないと云ふのが今日の有様である。我が國でも「貧すればどんする」と云ふ諺があるが、支那の孔子も「衣食たつて禮節を知る」と云つてゐる。

乍然昔の人は之は小人の生活であるから仕方がないと云つてゐたが、今日の人たちは之を大びらで當然なりと云ふやうになつた。

加之、むしろさうなるのが本當であつて、さうすることが道德であるさへ考へるやうになつたのが今日の社會ではないか。生活の外に人生もなく、人生の外に生活もないが、其の人生と生活とは經濟中心の生活を云ふのである。一金二金三も金、四も金五も金六も金、人間萬事金の世の中と金錢萬能を夢見てゐるのが今日の人ではないか。さうした意味に於て、金錢の外に人生の眞意義を知らない人を私はこゝに經濟生活の人と云ふ。中には肉慾と財慾との外に従に名慾に捕はれて不義の生活をすゝる人もあるが、それが人生の最後であらうか。佛教では之を肉慾の奴隸、名利（名譽と財慾）の奴隸と哀はれんでゐるが、本當の人生には永遠の生命と無限の生命とが輝いて來るではない。

身命を屠しての理想、限りなき永生の自覺、肉慾を越えたる世界、財慾の届かぬ天地、今少しく人生はさうした世界への一大飛躍が必要ではないか。それが私の所謂精神生活である。

二、精神生活

精神生活とは永遠の生命と無限向上の生活を意味する。所謂肉慾生活と經濟生活との繫縛から離れて、永遠の生命と價値の生活とに自己を向上せしむるの生活である。不死を知るものは永生を知る。永生を知るとは即ち自己の不滅を知るのであるが、此の不滅の自己にして始めて限りなき向上の生活もあるではないか。徒に肉慾の奴隸となるもそれは五十年か百年の有限に過ぎない。朝晩亡ぶべき有限の身に食と性とを好しむべき人として哀はれむべきものはない。ましてや財慾と名譽の爲めに日夜に奴隸となることは未だ眞實の自己を知らないが爲めではないか。

何の爲めの肉慾ぞや、何の爲めの經濟ぞや、いかに肉慾と經濟とが大切だからと云つて、私共は肉慾と經濟の爲めの人生でないことは明かである。性と食とを満足すればそれで人生は終りであらうか、いかに人生を考へても自己の保存と種族の保存とが人間の目的ではない。それでは單なる種馬にも過ぎぬではないか。永遠の生命、價値の生活、それこそは私共の求めて止まない人生の理想である、そこには經濟も大切である、乍然經濟が人生の究極であらうか。金のみが人生の理想ではない、金なき人に釋迦や孔子やキリストがあるではないか。金は人類の爲めの金にすぎない、金は無くても人生はありうる。

四、人生の眞意義

此の意味から云へば人類の生活に肉慾と財慾との必要とはあるが、それが必ずしも人生最後の生活であり理想であるとは考へられない。そこには更にそれよりも大なる永遠の生命と無限の向上とが私共に要求せらるゝではないか。此の生命と向上とを眞に發見して之に生ると云ふのが人生の第一義である。

古來人生は有限であるとは多くの佛者が示すところである。乍然何が爲めに佛者は人生を有限だと云ふか、それは必ずしも人生の有限を知らしめんが爲めではない。寧ろそれを通して限りなき永生の光を望め、そこに限りなき價値の人生にその人を生かさんが爲めに外ならぬ。五十年や百年の人生よりも千万無窮の天地と共なる眞實の人生に其の人を生かしめんが爲めである。

加之、經濟の生活を不問に置くのも決して經濟を無視するが爲めではなく、更にそれよりも無所有

の世界にその人を遊ばしめんが爲めである。

天地に漲ざる宇宙の生命、その生命こそ、本當の自分ではないか、自己の生命と天地の生命と決して別なるものでない。万法の生命も自己の生命も其の意味に於ては同じである。言かへれば宇宙の生命が万法の生命となり、万法の生命が即ち我等の生命となる。宇宙と万法と我等とは其の意味に於ては一である。

従つて自己が生きたるは万法に生きたるのだ。万法に生きたるは宇宙と一になることである。宇宙と一になることは宇宙の大生命に自己の一切を放擲することだ。所謂小我を脱して大我に歸ると云つてもよい。要はたゞ大自然に歸るのだ。徒らなる自己のはからひを止めて、一切を如來の御心に托することだ。こゝに如來と云ふのは天地に漲ざる宇宙の御心を云ふに外ならぬ。宇宙の御心とは天地の心である。一切を生さんとするの心と云つてもよい。佛教では之を佛心と云ふ。亦大慈悲の心であるとも云つてゐる。其の姿が即ち念佛である。

五、價値の生活

然ば無限の向上とは何であるか、それは要するに此の信念より一切を行するの生活である。飲むも食ふも經濟の生活も要するに此の大自然に任せたるの生活であればよい。それは必ずしも形式に捕はれるの必要はない。自然に現はれて來る本心の生活に従へばよい。古人は之を良心と云い、或は本心の働きと云ふ。キリスト教では之を神の勅命と云い、佛教では之を佛の使命と云ふ。孔子の所謂天命と云つてもよい。要は私利と私慾とを離れて、天地と共に生くるの心であり、生活である。佛教では之を自他不二の生活と云ふ、天地一体の生活と云つてもよい。他人もよくなり、我もよくなる、所謂調和の生活である。

生けるものゝ望み、それは永生と向上である。無病にして息災に、一家も榮え、一國も榮え、自他に共に永遠の生命と向上の生活とに、日に進み、日々に進むの生活こそ、眞に是人生の眞意義であり、又まさに價値生活の實現である。そこに眞實の向上もあり、進歩もあり、發展もある。何の爲めの智慧ぞ、智慧は偽を知り眞を知るのみが智慧ではない、眞は必ずとるべきもの、偽は必ず捨つべきもの即ち癡惡進善の行動に到つてこそ、本當の眞であり生活である。之を私は眞生と云つて居る。眞生の運動は此の主義の生活である。

之を總括すれば智情意の満足であり、眞善美の生活であり、科學と藝術と道德の調和と云つてもよいのである。宇宙と共に永遠の生命、佛と一なる眞善美の生活、それが即ち價値の生活であり、價値の人生である。

されど人生は有限である。此の有限の人生が無限の天地と交渉するところ、そこに無限の人生があり、永遠の生活があるではないか。(一九三二、六、六)

淨土教徒の望みに就て

土 屋 觀 道

〔淨土教の教へを聞くとよく諸行無常のことを聞き、此

の世の人生の甚だ頼むに足らないことを説くのを聞きま

人生の要求が單なる此の世だけの楽しみではあきたらないからのことであつて、淨土教の教へは更にそれらの悲觀の世界を越えて未來永劫の世界をそのあとに得やうとしてゐるからであります。

〔然ば淨土教は徒に此の世をはかなみ、未來を願ふて一

刻も早く此の世を去ることを願つてゐるかと思ふに決してさうではありません。否、それどころか此の世のあさましさや、人生の無常はかなさを充分に承認して、反つてその爲めに此の世の苦難を逃れやうとするのであります。

二

□而もそればかりでなく、一面此の世に望みを断つて未來に安住の世界を見出して、其の未來に對する望みと喜びと力の生活が此の世の生活に反映して、此の世の安らきを興えるの効果は非常に大なるものがあるのであります。

□加之、如來の慈光が十方に輝いて、念佛の衆生は此の世から其の光に攝取せられて捨てられないと思ふ信仰は念佛することによつて、此の世の生活が一變して來るのであります。

□即ち常恒不斷の光明に攝化せる、人は皆已に此の世から光明の生活となり、今までの悲觀の人生が歡喜の人生と變り、絶望の人生が望み生活と展開して來るのであります。

三

□尤もそれだからとて、今までの無常の世界や、悲しみ

の世界が悉く無くなつてしまふものではありませんが、淨土教徒の心の中には更にそれよりも、一層大なる常住の世界と喜びの世界とが此の世に輝いて來るのを見るのであります。

□此の光景を娑婆即寂光土とでも申すのでせうか、それとも煩悶即菩提とでも云ふのでせうか、私にはこの身のまゝの中に、更に新たなる如來の御光りが彼岸のかなたから輝いて來るのを感じるのであります。

□娑婆即寂光土と云ふことは娑婆が無くなつて寂光土となると云ふのではなく、娑婆はやつぱり娑婆であり乍らそこに眞實の光が輝いてゐるのであります。

□煩悶はごこまでも煩悶としてあり乍ら、そこにそのまま如來の慈光の輝くのを見るのであります。

四

□かくて、娑婆と淨土とは離れず、煩悶と菩提とは表裏をなし、眞實の世界が常住に展開して行くのを淨土教徒は見るのであります。

□従つてそこにはやるせなき悲しみもあり、喜びもあつて、所謂限りなき如來の慈光を仰ぐの生活とはなるのであります。(一九三一、四、三〇—三一、六、五再校)

根本佛教と淨土教

土 屋 觀 道

一、釋尊と等しき信仰

□佛教にも色々の教へがある。乍然近頃の佛教研究は主として佛教そのものゝ根本研究を明にしやうとするの傾きがある。之はその原を明にせずしてはその末をも明にすることができないからである。

□此の意味に於て、原始佛教の研究よりも更に根本佛教の研究として、釋尊その人の自ら信じた其の宗教を如實に知ると云ふことはこゝに最も大切な事である。

□釋尊と等しき信仰、即ち釋尊自身の到達せられた宗教信仰に自分達も到ると云ふことはできないものだらうか。

二、釋尊と現代

□近頃の佛教學者は所謂宗教學者に過ぎない。従つてまた、或る場合には單なる一種の宗教史家に過ぎないものもある。それも亦、或る意味に於てはいらぬとは謂はなない。乍然私共の要求して止まないものは更にそれよりも眞實の佛教そのものである。

□言いかへれば釋尊そのものゝ宗教を私共自身にも之を信ずることができないものかと云ふ念願である。少くともそれが釋尊から出發したものであり、且又釋尊そのものゝ眞髓であつて、それを中心とし、理想とする生活を離れない宗教である。

□此の意味からして、眞實の佛教は少くとも釋尊の根本佛教の精神を離れたものであつてはいけなない。

三、昔の淨土教

□然に從來の淨土教は果してそれらの中心に觸れたものがあつたであらうか。少くとも近頃の新しい佛典の研究や根本佛教の研究は之を裏切らうとするものが少くない。

□ときたま、新しき佛教の研究が淨土教義に觸れることもないではないが、それはともすれば釋尊そのものゝ自ら信ぜられた根本佛教とは可なりに相違するものばかりである。

□従つて之を釋尊の信仰若はその釋尊の生活の中に發見して之を述ぶるに云ふが如きは未だ史的に之を見ること

のできないところである。

□乍然之はまだ真に淨土教を釋尊第一の宗教として見るの識見なきが爲めではないか。

四、今日の淨土教

□私共は少くとも今日の淨土教は釋尊の眞の信仰であり宗教であつたとして、之の研究をすゝめて見るの必要はないか、否少くともさうした見方をする事によつて、始めて眞實の淨土教が現はれるでないかと思ふ。

念佛成佛の眞義

念 阿 生

一、念佛成佛は可能なりや

○茲に念佛成佛の眞義と云ふ、世には此の言葉を聞くさへ異様に聞える人があるかも知れません。それは念佛と申せば往生淨土の爲めに申すものであつて、念佛して佛となる云ふことはあまり言はないからであります。

○乍然、念佛成佛と云ふことは必ずしも間違つたことではないのであつて、佛教の理想から云へば成佛が本當であつて、往生も亦成佛の爲めであるからであります。從

つて、往生即成佛と云ふことから押して行けば念佛必ずしも成佛と云へぬことはないのであります。

二、往生の意味

○それにしても念佛往生と云つて、今まであまり念佛成佛と云はないのにも、それには相當の理由があつて、淨土は如來の在しますところ、常に楽しい處として私共の救はれるところ云ふ意味に於て、念佛成佛と云ふよりも凡夫の心にはくつろぎ多い感じを與へるものがあるか

らであります。

○それにまた、念佛成佛と云へばそこに往生と云ふ氣分が失はれて、佛の救済と云ふ味がなく、又他力往生の妙味も現はれぬやうな感じもするからであります。其の他一方には淨土には九品の往生もあつて、往生必ずしも即時の成佛であるとばかりも云へない點もあるからであります。

○従つて、古來から成佛は難いが往生は易いと云ふ風に一往往生と成佛とは區別してあるからであります。

三、念佛成佛

○それにもかゝらず私がこゝに念佛成佛と申すのはそこに又大なる尊い味のあるからであります。それは已に念佛往生と云ふことを一通り知つた上からして、更に念佛成佛と云ふことは、念佛が單に往生に止まらずして更らに往生成佛云ふ點にまで一貫するものがあるからであります。

○而も念佛成佛と云ふことは今までの念佛が念佛往生と云ふ爲めに、成佛の眞義が不明となつて、ともすれば其の意義を忘れやうとするものがあるからであります。

○念佛は往生の爲めではあるが、その往生は即ち成佛の爲めだぞと云ふことを如來を中心として人格的にならし

□少くともそこにまで淨土教を見ない限り、それは釋尊を中心とする弟子から見た宗教であり、佛陀そのもの、教へとしての釋尊の宗教ではないことになる。

□又或る一派の宗教では史上の釋尊を神秘化して、各人各自が自ら亦釋尊の如き解脱の人とならうとするの信仰を失つてゐるものもある。

□乍然斯くの如きが果して釋尊の信仰であらうか。之は私共の大いに反省すべきことがらである。(一九三〇、七、一一―再校三一、六、五)

むると云ふことは念佛成佛こそ最もよく此の意味を明瞭にするものがあるからであります。之私が特に念佛成佛と云ふことをこゝに現はした所以であります。

四、念佛成佛の眞意義

○乍然以上は我が宗門に於て、かねて言はれてゐる常軌に從つて、念佛成佛の眞義一往を申述べて見たに過ぎぬのであります。今一步を進めて私の思ふところを存分に云ふならば念佛往生と云ふことよりも、或は念佛成佛こそ、本當の佛教の原理に叶つてゐるではないかと思ふのであります。

○それは念佛往生と云ふのが普通であり、又念佛往生云ふのが宗門信仰の發展順序から云つても普通であります。如來に南無する當体の外に往生も成佛もないことから言へば能念と所念と不二なるところ即ちそれが念佛であり往生であり成佛であれば如來に南無する當体が直に往生即成佛の相であるからであります。

○して見ると念佛の當体は直に能所不二の佛の相であれば之を佛の方から望むれば衆生の上に佛が現はれた相であり、衆生の方から之を云へば衆生が佛になつた相とも云ふことができるからであります。

五、本願の成就

○尙一つ之を如来の本願から見ると念佛の成就はそのまゝが衆生成佛の當体ではないか、何となれば佛の本願は念佛往生と云ふのが其の文上の誓いではあるけれども其の文上の眞義は決して單なる往生に止まるべきものではなくして、往生の裏には成佛が即して居るからでありませう。(一九三一、六、五)

吾朋便り

□神奈川縣三浦 吉水辨道様

謹啓 陳者過日講習會場にて拜眉を得候折當分御在京の御言葉承り候へば御伺い申上べくと存じ候ひしに、あの日國許より電話にて所用の爲め呼び歸へされ候爲め、今度も御訪ねいたすべき機會を失し、歸來誠に残念に存じ候 誠に淨土教義及教團の前途多難なるもの有之候こと、存じ居り候折柄よろしく御指導相仰ぎ度く何分とも懇願に堪えず候

南無阿彌陀佛
□沼津 辻つや子様より

過日は静岡の御別時にいつもながらの御指導を戴き厚く御禮申上げました。御かげさまで短い日ではございましたが、大へんしつくりした氣分で修養させて頂きましたことを重ねて御厚禮申上ます、静岡の方々の御熱心な御姿を拜見してほんとうに嬉しく尊く感じました、私の胸には非常なつよいひびきを感得させて頂き感謝いたして居ります。いつまでも行きもぎりつのみいたして居る私、お久しぶりにてお元氣なお上人様にお目にかゝり大へん嬉しく感じ、同時にまたおはづかしく存じました。何卒今後とも一層の御指導のほごひとへに御願申上げます。合掌。

□京城 中山民様より
御上人御喜び下さい、輝かしい光のみち／＼た中に毎日賑に伸び／＼と暮して居ります。世の中の人が皆私に祝福の目をむけてくれてゐるやうに思はれます。人は他を傷けるものとのみ思つて居りましたのに……有難いこととございます、南無阿彌陀佛。
御上人と御別れいたしましたから半月になります、御傍に居りましたときははわかつた様な、わからぬやうな氣持でしたけれど、御別れして關釜聯絡船を下り朝鮮に一步踏出したとき灰色に思はれた彼の地の空が光に輝いて私を眞に迎えてくれる様に

思はれて實際雀躍いたしました。

京城に着きましたら、父が恰度鑛山の方に出張いたして居りましたので高橋(親類)の處に十日暮しました。店員が三十人居りますので機を見、縁に合つては眞生の意義を聞いて貰い、一人の店員の如きは非常に共鳴して貰いました。中には冷淡にせゝら笑ふ人もありました。

其の内に父が山から歸りましたので、高木につれられて家に歸りました。二年ぶりに懐しい父の慈顔を見ながら時々云ふておわびし様と考へてゐた言葉がとんでしまひ、たゞ涙と共にお父様と云つたきりでした。父も双眼に露をたゝえて「永い間父も泣いてゐた」とたつた一言でした。父は無言で限らない慈愛の言葉をかけて私をいだきしめてくれました。私は今まで父のこんな大きな愛を感じた事はありません。こんなに私の眞人になる事を願つ

て居られたのに、なぜいつまでも闇の世界をさまよつて居たかと思ひ、はづかしい子がいない氣で一パイでございます。だげ一萬一お上人や山口上人に逢ふ事がなかつたら父も生涯涙のかわくひまもなく、私も遂に闇から暗黒に消える悲しい、すさんだあわれな悪鬼と化したのでありませうに……南無阿彌陀佛。

御上人何と感謝の辞も御座いませぬ。私はこの氣持が満ちてくると空の一方を仰ぎ無心に念佛を稱へてゐます。嬉しい温い涙が頬をつたつて來ます。
私の家の中は只今何の技巧もなく虚偽もなく、たゞ愛の光が充ちてゐます。強制なき一團でございます。何も家の者に眞生を談じたわけでもありません。念佛をしいたからでもありません。たゞ空氣がさうなつて來ました。私は佛の絶大無邊の慈光を信じてゐます。

上人様も二十四日頃御歸りの豫定でしたのでこれまで御禮の御言葉が延びたわけでございます。何卒御体を大切にされて下さいませ。奥様を御子様御一同御元氣の事と思ひます。何卒よろしく御傳へ下さいませ。具体的な將來の方針は後便にて御相談いたしたいと思つてゐます。
南無阿彌陀佛。合掌。(五、二五)

□静岡市 藤井とし子様より
南無阿彌陀佛
御上人様先頃はいろ／＼と尊い御導きを戴きまして有りがたう御座いました。今時分御禮を申上げるなご随分ねけて居りますが、何だかいやに疲勞いたしまして頭が重く、其上留守中の重なる用事の處理であちこち致し遂ひ／＼大延引となりまして。御ゆるし下さいませ。
御上人御蔭様で心の底から念佛の有がたい事が分らせられた様です。お恥しい話ですが今迄は有がたいと

感じては居りますが眞の味が分りませんので眞剣におすがりする事が出来ませんでした。今朝なごはお勤めさせて頂いて居りますと、嬉しいやら有がたいやらで涙が出ました。一層シツカリとやらせて頂いて自分に出来るだけの事は何でもやらせて頂き自分に恵まれた此の体と心を出来るだけ良い事に使はせて頂く様にと只管願つて居ります、氣候不順な折柄皆様御大事に。合掌。(五月十三日)

津市 佐々木高子様より
先頃は御多忙中よくこそ御出で下さいまして、本當に有難う存じました。皆様大さう御喜びにて市の方々も大變にお話が佛教くさく無くして結構であつたとよろこばれました由市長お宅にて伺ひました。まだまだ當地としては初めてのことでこれから眞剣にならうとして居ります。又婦人會の方々は大そう感謝されました

やつと明るい世界を見出したとよろこばれて居ります。七月に御越し迄には充分用意をしておきたいとよりより話し合つて居ります。是非御力添へ下さいます様御願ひ申上ます。(六、三)

神戸病院にて 小林しな子様より
先生お久しぶりにお顔を拜し嬉う御座いました。御多忙中を御見舞下さるゝとは思ひもよらぬ御心づくしの程有難く何と御禮の申上様も御座いません。こちらは忘れがちなるに先生にはお忘れ給はず、あゝみおやの慈悲とは斯くの如きものかとつくづく感じさせられました。

如來様が私の身邊に立ちつくして呼びかけて居らるゝのが目に見える心地がいたしました。おかげ様で日々快方に趣き只今では体も快復し傷の痛みも之なくたいくつに困つて居ります。皆々忙しく暮して居らるゝのに私一人たいくつするとはもつた

いないと深く感謝して居ります。まだ二週間以上の入院さは何の病んきな事でせう。是から何をして病院生活を過さうかと考へて居ります此度の様に病中のんきに暮させて頂いたことは初めてと御座います、之も先生の御教へにあうたればこそと有難く深く感謝して居ります。それで御見舞に來て下さいます御友達にも此の有難さを笑い話にいたして居ります。皆様もにぎやかに過して歸つて頂く事が出来ます。之から御友達に少しづつでも宗教の味をおすそわけさせて頂きたいと思つて居ります。

後筆ながら先生御身御大切に御健康をいのり居ります。合掌。
大阪市 淺野茂様より
拜啓 益々御清榮奉慶賀候扱新聞紙上にて御承知の事と存候私は去る四月運輸課長の職を免ぜられ候在職六年有餘春の花を愛でず秋の紅葉を

知らず揮身の精力を職務に致し今日在ることは想像だに致さざりし事として異状なる衝動を受け候、内に顧みて疾しからざれば自責の念に起らざりしを流石に〇〇の情は抑へ難かりしが、不圖會て受けし師の御教の聲に呼び起され候「大自然の法則は嚴として動かさず、大自然の慈悲は渾然として治し峻嚴なる死の宣告を大自然の慈悲なる可きぞ」と此に於て考へ候

顧みれば私は十三歳の時両親を失ひしより三十有餘年困苦に堪へ欠乏と闘ひ御寧日なき活動を續け、今や身神共に疲勞の極に達し居り候、仍ち大自然は慈悲を垂れ給ひ私を此劇務より救ひ物質に換へて休養の時を與へ給ひたるなりと覺り申候其を覺りし時限りなき法悦に浸ると共に師の御教に感謝致候、宣告を受けたる翌日直ちに神戸衛生病院に入院致候院長は女醫にて「キリスト」教の信

者には有之或日入院患者全員と共に禮拜を行ひし際院長より「禍を喜びに換えましよう」との演示有之候師の御教示と教理に於ては深淺の區別はあれども私の心境に光明を與へられ申候、心の雲は愈々晴れて高風満月の心地と相成り候、爾來入院二十數日間疾病は治癒し疲勞は回復し尙ほ副産物として禁酒生活に入る事を得申候、治療の効果もさる事ながら師の御教に覺醒せられたることを謹んで感謝致候。 敬具

尙ほ六月一日より會社の囑託として榮職に就き候
六月二日
東京 土屋親道
愈々本年も六月となりました、之で今半年で又一年と云ふこと、思ひますが御障りもありませんか、遙に御案じ申して居ります。私共には幸に無事乍他事御休神下さい。
□たゞ異なるころは此の程厄ヶ崎の圓

平寺から松井せき子さんと靜阿から關さき子さんが見えてゐることです。總勢丁度十人で朝夕は可なり賑つて居ります。殊に此のほどから四五日は原稿書きで全く世間のことも判りません。
□去る四日の夜の集りは例會に似ず非常の集りでした。皆で四十名ばかり久々で見える人や初めて参加人もあつたので可なり熱心さでありました。一同念佛禮拜の後私の話したのは浄土教は必ずしも未來主義でないこと云ふことでした。未來往生を信じ乍らも今信じてゐる佛は未來の佛でなく現前西方の佛を今信じ、それによつて現在生活に安心立命しうる限りそれは必ずしも未來ではないこと云ふことです。

□更にそれのみでなく、現在説方の西方の彌陀は光明十方の佛として、念佛の衆生を攝取し給ふ限り、吾人は其の光の中に今日から暮すことが出来るのであつてそこから云へば本當の浄土教は決して未來教のみ云ふべきでないこと云ふことでした。
□尙或る雜誌の中に天台の止觀によつて

一切の病氣も癒ると云ふことがあつたの
を要点のところだけ飛び讀みしてかれて
私が話してゐた感情同源論と念佛とのこ
さを併せて語り合いました。

○尙神谷(善之進)様が新しい佛教漫畫を
二三枚御作下さいました。中にも信仰な
き家庭の苦樂が本當の人生でない云ふ
こと、現代世相の生活状態を階級的に
示された畫は近頃にはける一大傑作だ
の評判でした。此の分ではせまい二階も
一パイではいり切れなくなるかも知れま
せん。道友の集りほど嬉しい集りばあり
ませんね。

五月中の旅日記

土屋 觀道

○二日から七日までの佐屋の集りも無事
に終えて八日は津島と桑名と二ヶ所での
集りでした。津島では山田才助様方での
集りで朝晝の二回です。黒宮様方から一
緒に行つた人々と津島の人とで六七十名
の集りでした、初めての催しなのでどう
かと思つてゐたのに一家の御盡力で非常
の盛會でした。

○桑名は五井博士の病院でした。博士の
御母堂が永年の御願いでした、せめて病
院の方々や其の土地の方々には如來の慈光
を味つて頂きたいとの念願から起つたこ
とです。二三十名の集りでしたが七時頃
から十一時を過ぎました。

○九日、十日の二日は岐阜と大垣の集り
です。久々で舊友の方々にも會つて何よ
りの嬉しさでした。岐阜では一人の熱心
な青年と知り合ひとなり、大垣では五六
里もの遠方から集つて來た方も大ぶんど
かつたやうです。夜は昭和館での集りで
した。桑原様に久々で御會したのも嬉し
さの一つでした。永い間の病床さぞおつ
らい事だらうと同情の極みです。夜は淺
野先生宅に宿らせて頂きました。

○十月十一日は大阪と尼ヶ崎でした。行
基寺の山田上人と岐阜の古賀(清一郎)と
さんが一緒でした。大阪では菅尾龜次郎様
方です、初めての催しでどうかと思つた
が御一家の御盡力で全く御座敷一パイで
した。御店の方々や知り合ひの方々が集
まられたのでした。尼ヶ崎は圓平寺の集
りです、先住の年回を兼ねての集りの爲

めにいつもに倍しての集りでした。
○十三、十四日は和歌山の集りです。黒
野町での集りは當住及び御世話方の熱心
で目下非常な盛會です、法蓮寺の方も段
々基礎ができてさうで一同大いに楽しんで
居ります。因に十四日朝の間は黒江町の
同友 氏が新和歌浦に御案内を頂き初
めて事と得るところが多かつた。

○十五日は豊田様です。行基寺上人も初
めて見えると云ふので大馬力でもか、つ
たのでせう。道友も殊の外多勢集りまし
た、奥村、古家等の道友も久々で來られ
遠きは芦屋、尼ヶ崎、堺などからも集り
ました。私には涙の出るやうな嬉しさで
す。

○十六日は朝から神戸の鶴田様や藤村様
が發起者となつて行基寺上人歓迎の意味
で河内の天の山へ御案内を頂きました。
極樂寺上人や關浦様も御見えになるので
したが御差支えで残念でした。天の山は
南朝の古蹟地です。夜は神戸の極樂寺の
集りです。十五日は椎尾博士、十七日は
極樂寺當住と三日連続の講演です、私は
幸その中の日に入られました。百名を

越えての聴衆です。

○十七日は伊勢の大石、谷口さん、御宅
でした。相變らず道友の熱心さには打た
れます、さにかく道を求めやうとする心
が全く生きいきとしてゐるからです。こ
づかりは有産階級の氣分がありませ
ん。それだけに皆が本當に生きやうとし
てゐます。谷口御一家のおかげだご感謝
に堪えません。

○十八日は津の市會議事堂でした。市の
主催です。市長の奥さんと金蓮寺の奥さ
ん方のかくれたる力がこもつてゐます。
夜は金蓮寺での集りでしたが當市婦人會
の人が主でした。さうやら此の地にも法
燈が輝きさうに思へます。行基寺上人も
神戸から此地へ直行せられ、夜は阿部様
で御宿を願いました。

○十九日は四日市の眞生製藥所でした。
丸で買家へでも歸つた氣持ちです。こ
づかり勞資共調上下一体の眞生の工場で
す。それにしては今頃新兵衛(前當主)さ
んが生きてゐたらと思ひました。

○二十、二十一日は名古屋です。各地か
ら集つた方々も多く例によつて懐つかし

い集りでした。度々のことと今回が書
きません。

○二十二日は歸京です。名古屋から夜行
で歸つたのでした。三等寢台と云ふ格で
す。弁當上人のことを思へば寢台など少
々過分のいたりですが、翌日の能率を思
つたからです。

○二十四日は宗務所の高等講習會に出講
しました。僅々四時のころ正味三時位
半の話です。とても思ふ存分には話せま
せんが、「宗門傳道の一考察」と題して豫
てから考へて居ることを語つて見ました
○果してそれだけの反響があつたかそれ
は判りませんが、一、聖典成立年代の研
究と聖經釋題、二、根本佛教と淨土教
三、淨土教と現代思潮の三点について今
後の宗門がいかにあるべきか云ふこと
を語りました。

○第一の問題は大乗經典非佛説とすれば
淨土教の就人立信が破れること、なるが
之をどうするか。第二は根本佛教と淨土
教との間には其の説くところが非常に一
致する点と一致しない点とあるが一致せ
ない点をどうするか、第三は今日の社會

思想特に社會主義並に社會道德の思想變
遷に對して淨土教徒は之をいかに扱ふか
と云ふ点についての考察でした。

○尙序でながら最近の淨土教報社から出
てゐる淨土教報誌に私が椎尾博士の共生
會を此の際悪口云つたやうに書いてある
のは全く教報紙の誤傳に過ぎぬことを
御承知下さい。早速教報社へも其の旨通
知して置きました。私の述べたところは
「淨土教は本來凡入報土を説くのであり
又共生極樂を説く點から云へば全く共生
的であります。椎尾博士が共生主義をこ
り、それを此の土にまで持ち出されたこ
とは非常な達見として宗門人は學ぶべき
だと思ふ。たゞ乍然共生と云ふことにつ
いては全く同感だが、貪慾あくなき資本
主義一派の如き、或は又階級闘争を以つ
て主義とする社會主義一派の如き此の共
生を守らずして反對的行動に出るものに
はさうしたらよいか、そしてまた、現に
實際利益の分配に於て之を取りすぎてる
やうなものがありはせぬか、若しあり
すれば之等に對する宗門人の態度はど
うするか、之等は實際運動として大いに

反省すべきところであらう、此の點幸に明日博士の座談會もあることだから、先生に御尋したいと思ふ」云。

以上のことを教報氏が不幸にして誤解せられたこと、思はれます。

□翌日私は博士の座談會に列し、尙そのあまで控所で指方立相についての從來の考への誤りなど承り今更らのやうに私共の信仰と相一致する點を見出し非常に喜んでござりあり、尙先生に向つて「願くは先生の如き思い切つて宗門改革の第一線に立つて頂きたい。殊に私は宗乘問題に對して一層その必要を感じるものであ

る。願くは此の際思い切つてやつて下さいませんか」と御願した程でありました。先生も非常に喜んで頂いた位でした。

□こんなことは一寸考へれば何でもないことであるが、お互に悪口せられたこと、これは非常に気持ちの悪いことでもあり又それが延いては多くの共生會の人々、或はそれが又宗門未知の人々にまで悪い誤解を傳へると云ふことは非常に迷惑なかけること、なるので、一筆さうしたくないやうに書いておく次第であります。以上(六月六日)

唐澤別事念佛三昧會案内

七月二十三日より 一週間
前日登山 三十日下山のこと

誌代拂込者並寄贈者御芳名

○壹圓宛 清水市鶴飼義孝様、全友松富真様、柏崎小山市郡様、小池雪子様、新澤真吉様、小籠啓太郎様、市川三三様、山田みつ様、渡邊三十郎様、黒丸友治様、森山吉次様、猪爪かじ様、桑山對池様、會田軍治様、大橋スイ様、高野政五郎様、愛知青柳智月様、三車齊藤ちよ様、山下清太郎様、久保田領太郎様、大阪足立哲夫様、増本安藏様、土田徳三郎様、日暮與治右工門様、佐世保九品寺様、岐阜野口新太郎様、若園清作様、佐藤日出一様、村瀬はる様、横井田代様、浦賀銅州ノア様、角井くに様、梅原エイ様、長島文吉様 (以下次號)

(大正十四年八月十三日) 昭和六年六月十日印刷納本 (毎月一回十二日發行) 第十卷第六號
第三種郵便物認可 昭和六年六月十二日發行

本誌定價
一部 金十錢 郵税共
半年 金六十錢 全
一ヶ年 金一圓 全

注文の注意
◎講讀希望者は代金を添へて御申込下さい
◎誌代は總て前金御拂込の事
◎送金は振替によるのが便利
です

昭和六年六月十六日印刷納本
昭和六年六月十八日發行 行

東京市芝區芝公園十四號地九番
發行兼 編輯人 土屋 觀 道

名古屋市西區隅田町二番地
印刷人 百々治之助
電話西(五)二九三番

名古屋市中區錦屋町二丁目
印刷所 山田活版印刷所
電話東(四)三六五・三六六

東京市芝區芝公園十四號地九番
發行所 眞生社
振替口座東京四七二八八番